

雲南大学図書館所蔵外国刻本書について

沈 継 延

雲南大学図書館

中国雲南省の首都——年中春のような昆明市翠湖公園の畔にある雲南大学は、1922年12月8日成立して以来、既に80年近い歴史を誇る総合大学である。

大学は当時雲南省の都督唐繼堯によって創立され、「東陸大学」と名付けられた。1923年4月20日に正式に開学したため、この日が創立記念日に定められた。

1930年、東陸大学は私立から省立に改められ、1934年省立雲南大学となり、1938年に国立雲南大学に改められた。

雲南大学図書館は雲南大学の成立に伴ってでき、現在の蔵書量は120万冊余りになる。中国伝統の彫版印刷法で印刷した線装古籍は16万冊余りあり、経、史、子、集によって分類され、中に『全国善本書目録』に収録されたのは256種、4000冊余りあり、また数多くの和刻本、高麗本と安南本を所蔵している。

雲南図書館の創立初期に所蔵する線装古籍図書は、2万冊余りしかなく、しかも部類が完全ではなく、善本書は更に少なかった。北京、上海、杭州などの古籍書店で年々購入し、また省内の個人蔵書家に買い求めた結果、館蔵の線装書籍は大量に増えた。特に1954年全国大学調整の時、当時の貴州大学がなくなり、その蔵書は四川大学と雲南大学に与えられた。雲南大学図書館に与えられた線装古籍は5万冊余りに達し、館蔵線装書籍は増え、宋、元の刻本もあり、部類は自ら体系になっており、また数多くの外国の刻本は館蔵書籍の大きな特徴となっている。

歴史上、中国の彫版印刷技術を使い、漢字で中国の典籍や自国の著述を印刷した国は、主に朝鮮、日本とベトナムが挙げられる。従って、古籍版本学に「高麗本」、「和刻本」、「安南本」などの外国刻本が現れ、アジア古代「漢字文化圏」を形成した。これら外国刻本の出現は、各国の文化発展史に新しい内容を加え、中国とこれらの国の文化交流を促進し、漢文化と東アジア及び東北アジア各民族の相互理解を深めた。これらの典籍は一つの側面から中国古代文化が世界における歴史的意義を語ったと同時に、中国文化発展の中の若干の事実は、またこれらの文化典籍によって後世に伝えることができた。古籍版本学から見ても、中外文化交流史の角度から見ても、無視できない地位と作用を持っていることは言うまでもない。

歴史の変遷、政権交代その他の原因によって、外国刻本が中国に保存される数量は限られている。和刻本の漢籍を例にして言えば、全国の収蔵はたった3000種余りである⁽¹⁾。雲南大学図書館は外国刻本200余種所蔵し、その中に高麗本112種、和刻本113種、安

南本2種所蔵している。次に、中国の印本書との異同を目的に雲南大学図書館の館蔵について分析、検討し、これを通じて、中外文化の若干の軌跡を垣間見ることが期する。

一、高麗本

朝鮮は中国の印刷術を最も早く輸入した国である。紀元前二、三世紀に、両国の文化交流は既に盛んに行われていた。中国に法を求めてやってきた僧侶や留学生は、帰国の際に大量な仏教の經典と儒学の書籍を買って帰ったばかりでなく、彫版印刷術をも持って帰ったのである。朝鮮人は積極的に中国印刷術を吸収した上で、大量な中国典籍と朝鮮人の著作を印刷し、その上、印刷術を推進し、世界最初の金属活字を発明し、自分の印刷文化を形成した。

朝鮮での翻刻は、およそ十世紀の末に起源したものである。『高麗史』の記載によると、中国の典籍を最も早く刻印したのは、朝鮮の靖宗八年（1042）に刻印した『兩漢書』と『唐書』。その後靖宗十一年に『礼記正義』と『毛詩正義』を刻印し、文宗十二年に『黄帝八十一難経』、『傷寒論』、『本草格要』などを刻印した。これと同時に、朝鮮人自身の著作も漢字で大量に刻印され中国に入った。例えば『高麗太祖至穆宗七代事跡』、『東国通覧』、『高麗史』等である。

高麗本が中国に現存しているのは既に少ない。北京図書館も200余種しか所蔵していない。雲南大学図書館は115種所蔵し、量から言えば多い方である。これらの蔵書の中に、一部は朝鮮で印刷された中国の典籍、一部は朝鮮人の著作、また幾つかの抄本もある。次に詳しく説明していこう。

1. 朝鮮で印刷した中国の典籍

雲南大学図書館に所蔵する朝鮮印中国の典籍は全部で20種あり、全部活字本である。時代が最も早いのは『自警篇』五卷、宋の趙善瑋著、康熙三年（1666）の朝鮮活字本である。この本は宋代人物の逸事を収録したもので、学問、操修、齐家、接物、出处、事君、政事、拾遺の八種類に分けられる。また代表的な書物は例えば『四書章句大全』三十二卷、宋の朱熹著、朝鮮李朝純祖二十年（1820）の内閣本、李士表の「新添莊子十論」を附した『句解南華真経』十卷があり、これは宋の林希逸が著した朝鮮活字本で、『四庫全書総目』では「莊子口議十卷」として記録している。『朱書百選』六卷は、宋の朱熹が著したもので、朝鮮李朝正祖が定めた、正祖甲寅（1794）内閣本である。この本の目録の頁に「奎章之宝」という印が捺され、奥頁に大きな「御定朱書百選」と小さな「甲寅内閣活印」の文字が隷書体で書かれている。朝鮮王室から流失した書籍である。

その他に、館蔵する朝鮮の抄本は、時代が早いのは『歴代将鑑博議』十卷、宋の戴溪著、康熙三十年（1691）朝鮮の抄本がある。版本の価値が高いのは『評論出像水滸伝』二十卷七十回があり、明の施耐庵著、清の金聖嘆が点評し、王望如が評語を付け加えた清中葉の朝鮮の抄本である。この本の表紙に「百十伝」が題され、巻の端に「評論出像水滸伝」と題し、巻末毎に王望如が付けた評語がある。これは恐らく孫楷第編『中国通俗小説書目』を謄写した「坊刊王望如加評本」であろう。この本は中国本土では目録しか残していない。

2. 朝鮮印自国人の書籍

『高麗史』の記載によると、1091年高麗の戸部尚書李資義等が北京より帰国した時、朝鮮国王に次のように報告したという。「帝（北宋の皇帝趙煦）は我が国の書籍に好い本が多いと聞き、館伴書所に書目を求めるよう命じ、…凡そ一百二十八種」、合計5000巻ぐらいだった。これは朝鮮書籍印刷の多さと質の良さを語ると同時に、十一世紀の末に朝鮮で印刷した書籍は既に大量に中国に流入したことをも意味する。

雲南大学図書館所蔵の高麗本の中に、朝鮮人の著作は95種ある。年代がわりと早く、史料として価値の高いものは『高麗史』一百三十七巻が挙げられる。これは朝鮮李朝鄭麟趾等が勅命を受けて編集したもので、明景泰二年（1451）の活字本である。この本は中国の紀伝体史書の体裁を習い、913-1391年間高麗王朝の歴史を記述したものである。この本は李朝世宗三十一年（1449）年に編纂し始め、文宗元年（1451）に完成した。この本の最初の版本は北朝鮮や韓国には残っておらず、中国には二部しか残っていない。一部は上海図書館（破損あり）に所蔵し、もう一部は雲南大学図書館に所蔵している（内容が完全で抄本もついてある）。保存状態は良好で、印刷も綺麗であるこの本から、高麗本の高度な印刷レベルが窺える。『国朝宝鑑』七巻は、朝鮮李朝申叔舟などが勅命を受けて編集したもので、明天順元年（1457）の活字本である。申叔舟は鄭麟趾と同じく朝鮮李朝世宗時期の集賢殿学士であり、世宗はかつて鄭麟趾に太祖、太宗二朝の宝鑑を編集するよう命じたが、完成しなかったため、申叔舟にこれを続けるように命じ、そしてこれを完成した。この書の体裁は中国司馬光の『資治通鑑』に習い、編年体の方式で朝鮮李朝太祖、太宗、世宗と文宗の出来事を記述した。この書は十五世紀の朝鮮で甚だ大きな影響力を持ち、数次にわたって再印刷し、今日に伝わったのは30余種の版本がある。『進饌儀軌』、『進宴儀軌』の二書は、朝鮮李朝高宗時代の王室刻本である。1892年、高宗李熙が即位して30年にあたり、全国で盛大な祝典が行われた。この時に疏、樂、詩、文、儀、饌、賞、用などの関係する文字を編集して書かれたものは『進饌儀軌』である。1901年、李熙が満五十歳になり、また祝典が行われた。この時に編集したものは『進宴儀軌』である。この二書は共に朝鮮宮廷祝典儀式の規制とその特色を反映したもので、その巻頭『図式』に附した挿し絵は、生き生きとして、上手く刻されており、高麗刻本の中に藝術性の高い珍品といっても過言ではない。

版本の角度から見ると、この高麗本には刻本13種、鉛印9種、石印1種、抄本12種、活字本80種余りあり、活字本の数量は刻本を遙かに超えた。これは中国の古籍状況と正反対である。朝鮮人は中国に彫版印刷の技術を学んだだけでなく、畢昇の泥活字方法も身につけ、それを基本にして世界最初の金属活字を発明した。大量印刷の活字本は高麗本の一大特色である。朝鮮の本の印刷は、その版式は中国の古籍を真似たものであるが、違うのは、高麗本の書及び字体が比較的大きく、使用した紙の多くは真っ白で丈夫な皮紙であり、その印刷の出来のすばらしさは優れた紙質と深く関係するものである。高麗の皮紙は昔から中、日の蔵書家に愛された。朝鮮の印書紀年は基本的に中国の紀年を使用し、李朝は完全に明代の年号を使っていた。明が滅ぼされてからも習慣的に崇禎の年号を使い、清の年号は殆ど使わなかった。

二、和刻本

刻本書が日本に現れたのは朝鮮に比べて少し遅かった。記載によると、日本の寛治二年(1088)に印刷した『成唯識論』は日本の刻本書の最も早いと確信されたものである。

日本の刻本書は中国刻本書に習ったり、或いは直接に中国の刻本技師の指導で行われたものである。中には中国の仏教經典、儒学書を翻刻することが多く、日本人の著述は極めて少ない。後に、特に明治維新以降は民族の精神文化が提唱され、伝統漢学の書籍も刻印されるが、日本人の著作が多くなり、刻印書籍の主流となった。資本主義が発展し、西洋の学問が盛んになり、自然科学などの新しい学問の書籍も大量に現れた。

雲南大学図書館に所蔵する和刻本は113種あり、中には和刻本漢籍は49種、日本人が著した漢文書籍は63種、和刻本の朝鮮書籍は1種あり、次にそれぞれ詳しく述べていく。

1. 和刻本漢籍

雲南大学図書館所蔵の49種の和刻本漢籍の内容は中国典籍のあらゆる分野に涉った。時期の最も早いものは明の凌稚隆が著した『漢書評林』百巻で、日本の明暦三年(1657)の松栢堂活字本である。その他のものは例えば中国本土には既に残っていない唐の魏征が編纂した『群書治要』五十巻があり、この書は九世紀に日本に伝来し、元和二年(1615)江戸幕府第一代大將軍徳川家康が金沢文庫本を基本に、銅活字で印刷することを命じた「駿河版」であり、印刷の部数は51部しかなく、家康の子弟に配ったという。後、天明元年(1781)尾張家大納言宗睦は駿河版をもとに再び校正を加え再版を果たした。「天明版」である。雲南大学図書館にあるのは、天明七年(1787)尾張国刊行の印本である。また唐の陸徳明が著した『經典釈文』三十巻については、日本享和元年(1801)に翻刻した抱經堂重刻本がある。晋の郭象が注釈した『郭注莊子』十巻については、天明三年(1783)の刻本がある。清の王士禎が著した『唐賢三昧集』の三巻については、文化七年(1810)の刻本がある。また中国の叢書をも印刷していた。例えば宋人が編集した日本東京松山堂の刻本『「校訂」七書』は、「孫子」、「呉子」、「司馬法」、「尉繚子」、「三略」、「六韜」、「太宗」の7種の兵書を収録し、その巻頭に「世に出ている兵家の七書は、脱字、間違い等が多い。…この度刻印した七書の正文は、古今諸家の正本数部を参考にし、歴代名賢の確実な説を折衷し、良い部分を取り、誤った部分を除き、これらを補足した上、字画を端正にし、文章を読みやすくし、直ちに本来の様子に修復した」と書いてある。日本が中国の典籍を刻印する場合、簡単な翻刻に止まらずに、校正も綿密に行き届くところまで行ったことがここから窺える。また例えば元人が編集したもので、日本の大正三年(1914)に京都帝国大学が元本を参照して印刷した『覆元藪古今雜記三十種』の場合、この本に収録した雜記の中に、明の蔵懋循の『元曲選』に載せていないのは17種もある。載せているものでも、曲名が同じで、内容が異なり、または曲の数の違いなどはたくさんあり、極めて高い参考価値をもっている。日本の狩野直喜は序に次のように述べた。「談曲家は『靈鬼簿』、『太和正音譜』の諸書について、曲目を識するだけで、本書を見ることはない。図らずもこの書が今に出たのは藝林の快事ではなからうか」と。この本は朱印本で、優雅鮮明な文字、均等な墨色から、初印本であることは窺える。

2. 日本人の漢文書籍

雲南大学図書館は63種の日本人著作を所蔵しており、最も注目すべきものは日本の史書と農、医学類の書籍である。史書では例えば『大日本史』、『増補日本外史』、『日本政記雑記』、『史鑑』等が挙げられる。江戸時代は日本の史学が最も発達した時期であり、『大日本史』はその時期における日本史学の代表作である。この本は二百四十巻の他に補巻もあり、源光国が監修し、源綱条が校正した。『増補日本外史』十六巻は、頼襄子が著したもので、『史記』の世家の体裁及び書き方を習い、平氏、源氏、新田氏、足利氏、徳川氏等の事跡を記し、各氏の記録の前に系譜を加え、日本の將軍幕府盛衰を研究した重要な史籍である；『史鑑』十六巻は武元恒が著したもので、編年体を使って、史実を描き、中国史書の風貌が窺える。農医学類の書籍のなかでは、医書の年代が比較的早く、例えば丹波元簡が著した『脈学輯要』の三巻は、寛政七年（1795）江戸万籙堂の刻本であり、同じ年に刻印したものとして丹波雅忠が著した『医略鈔』も挙げられる。『千金翼方』三十巻は、中国唐代の孫思邈が著し、宋代の林億等が校正し、日本の文政十二年（1829）に元大徳十一年の梅溪書院の刻本をもとに転写したものである。『華氏中蔵経』八巻は、日本の伊澤蘭軒が周錫瓚の校正した刻本ものをもとに転写した上、呉勉学の刻本を参考にして朱筆で校正を加えたものである。これについて多田伊織女史が「雲南香港訪書録」の調査報告において詳しい紹介をした⁽²⁾。農書の場合については、例えば佐藤信淵著の『種樹園法』二巻、平野師応編集の『製糸全書』四巻などは、皆日本の明治期にできたもので、明治維新の科学を提唱し、実用を重んじる精神を反映したものである。

ここで特に話すべき物は半井直澄編集の『神職宝鑑』である。この本は上下二巻に分かれ、上編は日本神社の建築構造、装飾及び配置器具、祭器、楽器について紹介し、下編は祭典、神饌、祝詞、祭服、作法などについて詳しく説明し、文章の間に挿し絵が配置され、線条流暢で、本物のように描かれている。大部分の挿し絵は多色の重ね刷りで、日本の重ね刷りの技術が相当熟した段階に至っていることが窺える。この本は明治三十二年（1899）に印刷したもので、明治維新後の日本は、西洋文化を取り入れると同時に、民族精神の提唱にも力を入れたことの側面が窺える。

また、雲南大学図書館は和刻本の韓籍も一部所蔵している。これは十三世紀高麗麟角寺の僧一然が編纂した『三国遺事』である。この本は漢文で書かれ、編年体の体裁を使い、古代朝鮮三国が鼎立する時期の新羅、高句麗、百済の三国の歴史及び仏教の伝達状況を記録した。これは日本の大正十年（1921）京都帝国大学文学部珂羅版の転写である。このほかに西洋の翻訳書も一部所蔵しており、明治五年（1872）に中村敬太郎が日本語に翻訳したイギリス人ミルの『自由之理』などが見られる。

館蔵の和刻本の中に、刻本が58種、活字本が四種、活字印刷本が26種、珂羅版の写真製版印刷が19種、石版印刷が4種、抄本2種それぞれある。時代が下がるにつれて、活字印刷が流行り、石版印刷と写真製版印刷は割付の便利さがあり、古法は既に跡が残らない。和刻本の様式は中国の古籍と同じであるが、行間が緊密であること、字体が小さく、書は高麗本ほどゆったりしておらず、大部分の書籍には仮名や日本語の発音がついていることは和刻本の

一大特色といえるだろう。

三、安南本

雲南大学図書館が所蔵するベトナムの刻本は2種しかない。『大越史約』二巻、ベトナムの黄道成が著した、成泰丙午年（1906）の刻本と、黄高啓が著した維新甲寅年（1914）の刻本である。この二書は共にベトナムの史書である。『大越史約』は、刻印の質が悪く、字体の大きさは統一していなく、行間距離も整然としない。周囲の縁が緊密に繋がっていることや、版心の魚尾と縁側の線が一体していること、また版が断っている現象などから、これは活字本ではないことが判明できる。『越史要』は刻印の質が良く、字体は典型的な清末の匠体である。この二書は共に黄色い紙を表紙にし、装丁や様式は中国の刻本と同じである。

以上雲南大学図書館が所蔵する外国の刻本についての紹介を通じて、次のことが言えるのではないかと思う。即ち朝鮮、日本、ベトナム三国の印刷技術はそれぞれ直接に、或いは間接に中国から伝来したもので、それぞれの国において中国印刷技術の風貌を保つ上に、各国それぞれの特色を形成した。この千年余り以来、文化史上独特で、且つ壮麗な景観を見せ、中日、中朝、中越文化の相互影響と受容を見せた。

この度このシンポジウムに参加し、雲南大学図書館所蔵の外国刻本の状況について紹介できることは、図書館としても、私個人にとっても光栄なことである。学力不足の為、間違った見解も多々あるかと思うけれども、会場の専門家にご指摘、ご意見をいただきたいと存ずる。この報告で少しでもご参考になることがあれば、私にとってはまことに喜ばしいことである。

注

- (1) 王宝平『中国館蔵和刻本漢籍目録』、杭州大学出版社、1995年2月
- (2) 『日本研究』第22集167-176頁

云南大学图书馆藏外国刻本书述略

沈 继 延

昆明云南大学图书馆

坐落于中国云南省省会——四季如春的昆明市翠湖公园畔的云南大学，是一所综合性大学。学校成立于1922年12月8日，已有近80年的历史。她由当时的云南省都督唐继尧创办，命名为“东陆大学”，1923年4月20日正式开学，故把每年的这一天定为校庆纪念日。1930年，东陆大学由私立改为省立，1934年更名为省立云南大学，1938年改为国立云南大学。

云南大学图书馆伴随着云南大学的诞生而问世，现藏书120万余册。以中国传统雕版印刷成书的线装古籍书16万余册，按经、史、子、集类分，其中列入《全国善本书总目》的有256种，4千余册，并藏有数量相当的和刻本、高丽本和安南本。

我馆入藏的线装古籍图书，建馆初期仅2万余册，门类不全，善本书更付阙如。经向北京、上海、杭州等地古籍书店逐年选购，并在省内访求私家藏书，使馆藏线装古籍书数量大增，特别是1954年全国院系调整，当时的贵州大学撤销，其藏书划归四川大学和云南大学。调拨到我校图书馆的线装古籍达5万余册。至此，馆藏线装古籍数量猛增，有了宋、元旧刻，门类自成体系，特别是数量可观的外国刻本书，成为我馆藏书的一大特色。

历史上，运用中国雕版印刷术，并用汉字模仿印刷中国典籍和本国人著述的国家，主要是朝鲜、日本和越南，因而古籍版本学中出现了“高丽本”、“和刻本”、“安南本”等外国刻本，形成亚洲古代“汉字文化圈”。这些外国刻本的出现，为各国文化发展史增添了新的内容，促进了中国与这些国家的文化交流，加深了汉文化与东亚及东北亚各民族的相互理解。它从一个方面展现了中国古代文化的世界历史性意义，同时，中国文化发展中的若干片断，又依赖这些文化典籍得以传之后世。无论从古籍版本学，还是从中外文化交流史的角度，它都具有不可忽视的地位和作用。

由于历史的变迁、朝代的交替及其它原因，外国刻本留存中国的数额不多，以和刻本汉籍言，全国入藏仅三千余种。^①云南大学图书馆有幸度藏外国刻本二百多种，其中高丽本112种，和刻本113种，安南本2种。下面，就云南大学图书馆藏作一些综述分析，以期看出它们和中国印本书的异同，并从中了解中外文化的一些轨迹。

一、高丽本

朝鲜是最先传入中国印刷术的国家，早在公元前二、三世纪，两国的文化交流就日益密切，到中国求法的和尚和留学的学生，在他们回国时不仅买走了大批的佛经和儒书，也把雕版印刷术带入朝鲜。朝鲜人在积极吸收中国印刷术的基础上，不仅雕印了大量的中国典籍和朝鲜人自己的著作，并且推陈出新，创造了世界最早的金属活字，形成了自己的印刷文化。

朝鲜刻书，大约起源于十世纪末，据《高丽史》载，最早刻印中国典籍大致是朝鲜靖宗八年（1042）刻成的《两汉书》和《唐书》，随后，靖宗十一年刻成《礼记正义》和《毛诗正义》，文宗十二年刻成《黄帝八十一难经》、《伤寒论》、《本草格要》等书。与此同时，朝鲜人自己的著作也用汉字大量刻印并传入中国，如《高丽太祖至穆宗七代事迹》、《东国通览》、《高丽史》等。

高丽本在中国留存的已不太多，北京图书馆也仅藏 200 多种，云南大学图书馆有 115 种，其量相对而言是可观的。这些藏书中，部分是朝鲜印中国典籍，部分是朝鲜本国人著作，还有几部抄本，分别叙述如下：

1. 朝鲜印中国典籍

云南大学图书馆藏朝鲜印中国典籍共 20 种，均为活字本。时代最早的是《自警编》五卷、宋赵善璘撰，康熙三年（1666）朝鲜活字本。该书汇集宋人言行，分为学问、操修、齐家、接物、出处、事君、政事、拾遗八类。较具代表性的如《四书章句大全》三十二卷，宋朱熹原撰，朝鲜李朝纯祖二十年（1820）内阁本。《句解南华真经》十卷，附李士表“新添庄子十论”，宋林希逸撰，朝鲜活字本，《四库全书总目》著录为“庄子口议十卷”。《朱书百选》六卷，宋朱熹原撰，朝鲜李朝正祖御定，正祖甲寅（1794）内阁本。此书目录页钤有“奎章之宝”大印，内扉页刊“御定朱书百选”六个隶书大字，“甲寅内阁活印”六小字，当为朝鲜王室散佚之书。

另外，馆藏几种朝鲜抄本，时代较早的是《历代将鉴博议》十卷，宋戴溪撰，康熙三十年（1691）朝鲜抄本。版本价值高的是《评论出像水浒传》二十卷七十回，明施耐庵撰，清金圣叹评点，王望如加评，清中叶朝鲜抄本。此书封面题“百十传”，卷端题“评论出像水浒传”，每卷卷末有王望如评语数条，估计就是誊抄孙楷第《中国通俗小说书目》著录的“坊刊王望如评本”。此书中国本土只见著录，未见其书。

2. 朝鲜印本国人书籍

据《高丽史》载，公元 1091 年高丽户部尚书李资义等人从北京归来，向朝鲜国王报告说：“帝（指北宋皇帝赵煦）闻我国书籍多好本，命馆伴书所求书目授之，……凡一百二十八种”，共计 5000 卷左右。这即反映了朝鲜印书之多且好，也说明了十一世纪末朝鲜印书已大量传入中国。

云南大学图书馆藏高丽本中, 朝鲜人著作有 95 种。年代较早, 且史料价值高的首推《高丽史》一百三十七卷, 朝鲜李朝郑麟趾等奉敕修, 明景泰二年(1451)活字本。本书仿中国纪传体史书, 记述公元 913—1391 年间高丽王朝的历史。此书开始编撰于李朝世宗三十一年(1449), 文宗元年(1451)完成。该书的最早印本据说在朝鲜和南韩均已失传, 中国境内也仅存二部, 一藏于上海图书馆(有残缺), 一藏于云南大学图书馆(内容完整, 有抄配)。该书书品宽朗, 印刷精美, 高丽本之印刷水平于此可见一斑。《国朝宝鉴》七卷, 朝鲜李朝申叔舟等奉敕撰, 明天顺元年(1457)活字本。申叔舟与郑麟趾同为朝鲜李朝世宗集贤殿学士, 世宗曾命郑麟趾编太祖、太宗两朝宝鉴未果, 续命申叔舟继之, 成此书。体例仿中国司马光著《资治通鉴》, 用编年体方式记述朝鲜李朝太祖、太宗、世宗和文宗的史事。该书十五世纪在朝鲜的影响甚大, 反复多次印刷, 传至今者有 30 余种版本。《进饌仪轨》、《进宴仪轨》二书, 为朝鲜李朝高宗时的王室刻本。1892 年, 高宗李熙即位 30 年, 全国举行盛大庆典, 同时辑疏、乐、诗、文、仪、饌、赏、用等相关文字成《进饌仪轨》; 1901 年, 李熙年满五旬, 又举行庆典, 辑书为《进宴仪轨》。两书皆是例行体例, 反映了朝鲜宫廷庆典仪式的规制和特色, 其书卷首《图式》所附插图, 版刻精良, 形象生动, 不失为高丽刻本中的艺术珍品。

从版本的角度看, 这批高丽本有刻本 13 种, 铅印 9 种, 石印 1 种, 抄本 12 种, 活字本达 80 多种。活字本远比刻本多, 这与中国古籍的情况正相反。朝鲜人不但向中国人学习了雕版印刷术, 还掌握了毕升的泥活字方法, 在此基础上推陈出新, 产生了世界最早的金属活字, 大量摆印成书, 活字本成为高丽本的一大特色。朝鲜印书, 行款版式均仿中国古籍, 不同的是高丽本书品及字体较大, 书纸多为皮纸, 洁白坚韧, 其印书之精美与纸的优良分不开, 因而高丽皮纸历来为中、日藏书家喜爱。朝鲜印书纪年基本为中国纪年, 李朝完全用明代年号, 明亡后, 习惯上用崇祯纪年, 很少使用清代年号。

二、和刻本

刻本书在日本的出现略晚于朝鲜, 据载日本宽治二年(1088)印成的《成唯识论》是目前日本刻本书中最早最可信的刻本。

日本刻书是在仿效中国刻本书和在中国刻工的直接帮助下开始的。早期以翻刻中国佛经、儒书为多, 日本人著述极少。到了后期, 特别是明治维新后, 倡导民族精神与民族文化, 虽然也刻印传统汉学的书籍, 但日本人著作的比重增大, 成为主导。由于走资本主义的道路, 西学渐开, 自然科学等方面的新学书籍也大量的出现。

云南大学图书馆藏和刻本 113 种。其中和刻本汉籍 49 种, 日人汉文书 63 种, 和刻本韩籍 1 种, 分述于后。

1. 和刻本汉籍

馆藏 49 种和刻本汉籍涉及了中国典籍的各个门类。时代最早为明凌稚隆撰《汉书评林》一百卷，日本明历三年（1657）松柏堂活字本。其他的如：《群书治要》五十卷，为唐代魏征领衔编纂，中国本土早已散失。此书于九世纪传入日本，元和二年（1615）江户幕府第一代大将军德川家康授命以金泽文库本为底本，以铜活字排印，只刊印 51 部，分配其子侄各处，为“骏河版”。天明元年（1781）尾张家大纳言宗睦以骏河版为基础，重加校勘，再版梓行，为“天明版”。馆藏为天明七年（1787）尾张国刊印本；唐陆德明《经典释文》三十卷，日本享和元年（1801）翻刻抱经堂重刻本；晋郭象注《郭注庄子》十卷，日本天明三年（1783）重刻本；清王士禛《唐贤三昧集》三卷，日本文化七年（1810）刻本。难能可贵的是印刷了部分中国丛书，如《（校订）七书》，宋阙名辑，日本东京松山堂刻本，收“孙子”、“吴子”、“司马法”、“尉繚子”、“三略”、“六韬”、“太宗”七种兵书，其首曰：“世环通行兵家七书者，鹵莽灭裂衍脱讹缪不为不多矣。……今所刻七书正文，盖参考古今诸家正本数部，且折衷历代名贤确论的说，采美择善，去莠补缺，而令字画端正，句读晰然，顿复旧观”。因此可看出日本刻印中国典籍不仅仅是简单的翻刻，其校讎也甚为精到。再如《覆元槩古今杂记三十种》，元阙名辑，日本大正三年（1914）京都帝国大学据元本影印。此书所收杂记明藏懋循《元曲选》不载者达十七种，即使藏选已载者，折数不同，曲名同曲文异，曲数互有牴牾，乃至同曲中字句之异同满纸皆是，有极高的参考价值。日本狩野直喜在序中称：“谈曲家于《灵鬼簿》、《太和正音谱》诸书，仅识曲目，不见本书。不图此书至今而出，岂非艺林快事”。此书为朱印本，清晰典雅，墨色匀称，当为初印本。

2. 日人汉文书

馆藏 63 种日本人著作，最引人注目的是日本史书和农医类书。史书如《大日本史》、《增补日本外史》、《日本政记杂记》、《史鉴》等。江户时代是日本史学最发达的时期，《大日本史》是该时期日本史学的代表作，此书二百四十卷又补卷，源光国修，源纲条校；《增补日本外史》十六卷，日本赖襄子成撰。该书仿《史记》世家体例及笔法，分警纪平氏、源氏、新田氏、足利氏、德川氏等事迹，与各氏之首列谱系，是研究日本将军幕府兴衰的重要史籍；《史鉴》十六卷，武元恒撰，采用编年体叙述史事，有中国史书之风貌。农医类书中，医书年代相对早些，如：丹波元简撰《脉学辑要》三卷，日本宽正七年（1795）江户万籍堂刻本，同一年刻印的还有丹波雅忠撰《医略钞》。《千金翼方》三十卷，中国唐代孙思邈撰，宋代林亿等校正，日本文政十二年（1829）据元大德十一年梅溪书院本影印。《华氏中藏经》八卷，日本伊泽兰轩以周锡瓚校刻本为底本影抄，并参稽吴勉学刻本作朱笔批校。多田伊织女士在“云南香港访书录”的调查报告作了详细介绍。^② 至于农书，如《种树园法》二卷，佐藤信渊著；《制丝全书》四卷，平野师应编辑等等，均成书于日本明治时期，折射出明治维新提倡科学、重实用的精神。

值得一提的是《神职宝鉴》一书，日本半井直澄编辑，分为二卷，上篇介绍了日本神社的建筑物结构、装饰及调度器具、祭器及乐器，下编就祭典、神馐、祝词、祭服、作法等方面逐一作了说明，行文中配有相应插图，线条流畅，形象逼真，大部分为多色套印，说明日本套印技术已经相当成熟。此书印于明治三十二年（1899），反映了明治维新后日本接受西方文化的同时，也重视民族精神的倡导。

另外，馆藏和刻本韩籍一部，为十三世纪高丽麟角寺僧一然撰《三国遗事》。该书以汉文撰成，采用编年体，记述古代朝鲜三国鼎立时期的新罗、高句丽、百济三国历史及佛教传布情况，为日本大正十年（1921）京都帝国大学文学部珂罗版影印本。翻译西方作品一部，为日本明治五年（1872）中村静太郎用日文译英国弥尔撰《自由之理》一书。

馆藏和刻本中，刻本 58 种，活字本 4 种，铅印本 26 种，珂罗版影印 19 种，石印 4 种，抄本 2 种，时代渐进，铅字风行，石印影印更便于检排，古法已荡然无存。和刻本行款与中国古籍同，惟行款紧密、字体偏小、书品不及高丽本疏朗大方，绝大部分书籍施以假名或日语读音，构成和刻本之一大特色。

三、安南本

云南大学图书馆藏越南刻本仅两种。《大越史约》二卷，越南黄道成撰，成泰丙午（1906）刻本；《越史要》三卷，越南黄高启撰，维新甲寅（1914）刻本。二书均为越南史书，《大越史约》刻工较差，字体大小不一，排字行距不整齐，但绝对不是活字本，因四周边栏衔接紧密，版心鱼尾与边线无隔断，且有断版现象。《越史要》刻工较好，字体为典型的晚清匠体。二书都以黄纸为封面，装帧、款刻行款与中国刻书无异。

综合以上对馆藏外国刻本书的阐述，我们可以说朝鲜、日本和越南三国的印刷术都由中国直接或间接传去，在保持中国印刷术风貌的基础上，各国又形成了各自的特色，千余年来，形成了文化史上一个独特而壮丽的景观，显示了中日、中朝、中越文化之间的相互影响、相互交融。

能够参加如此盛会，宣传和揭示馆藏外国刻本书的典藏情况，本人幸甚！云南大学图书馆幸甚。由于学识有限，见闻不广，错误在所难免，有望在座的专家指拨教正。如果能在我的发言中得到一点点启示，本人就感到万分的欣慰了。

谢谢！

注

①王宝平《中国馆藏和刻本汉籍目录》，杭州大学出版社，1995年2月

②见《日本研究》第22集167—176页。